



東京五輪閉会式に思うこと

医薬経済社
坂口 直

暗闇の中、「蛍の光」のメロディに合わせて無数の松明が揺れ、電光掲示板には「SAYONARA」の文字が浮かぶ——。64年10月24日に行われた東京五輪の閉会式的一幕だ。年々、映像技術の進展に伴い、さまざまな演出が施されているが、東京五輪の閉会式はこのシンプルさ故に神々しく、また、キャンプファイヤーのような暖かみさえも感じられる。当初、整然と入場するはずだった選手団は、各国入り乱れ、日の丸を持った旗手は、他国の選手に肩車され、トラックを練り歩いた。その光景を歴史小説の名手である井上靖は「その乱雑さは和やかでむしろ美しい」と捉えた。

今も伝説の閉会式として語り継がれているが、残念なことに東京五輪2020は開催さえ危ぶまれている。新型コロナウイルス感染症は未だ収束する兆しは見えず、世界では日々、万単位で患者数が増えている。一時は落ち着いた東京都も7月中旬から感染者が目立ち始め、早くも第2波の到来を予感させる。

東京五輪2020開催の大前提は、治療薬とワクチンの開発だ。世界中の研究機関が果敢に挑んでいるが、まだ確たる製剤はつくられていない。世界中の人々が今か今かと待ち望んでいる一方で、通常の医療で使われている医薬品に関しては危機感が薄い気がしてならない。原薬の多くは中国、インドから調達しており、流行次第では流通が止まってしまう恐れがある。年初の第1波は何とか乗り切ったが、迫る第2波に耐え得るほどの原薬の在庫は確保できているのだろうか。

日本製薬工業協会は6月に「感染症治療薬・ワクチンの創製に向けた製薬協提言」をとりまとめ、そのなかで原薬については調達や備蓄において公的支援の要望などを盛り込んでいる。しかし、医療用医薬品の約8割はジェネリック医薬品が占めている。日常の医療はジェネリック医薬品が支えているといっても過言ではないが、世間には知られていない。

すでに行動しているかもしれないが、日本ジェネリック製薬協会も何らかのメッセージを世間一般に送る必要があるのではなかろうか。パンデミックが発生した場合、原薬の確保が難しくなり、現在の医療を維持することが難しいことを前もって発信しておけば、深刻な事態が生じたとしても一定の理解は得られやすいのではないかと。世界各国、または、日本国内でも、互いに融通し合えるような関係にあるのなら杞憂に終わるのかもしれないが、そう悠長なことは言っていられない状況にある。